

東山道が果たした役割と地方の地域社会発展に及ぼした影響について(その2)

正会員 足利工業大学 福 島 二 朗

正会員 足利工業大学 西 片 守

On the Tosendo, about the Functional parts and Influences
with a Development of a Social-Community (Part II)

By Jiro FUKUSHIMA and Mamoru NISHIKATA

(概 要)

本研究は、京と東国との大動脈であった東山道を取りあげ、古代から近世に至る間、その果たしてきた役割を時代ごとに明らかにすると共に、地方の地域社会発展にどのような影響を及ぼしたかを、東山道の経路に位置した栃木県足利市を例として考察したものである。

今回は第2報として鎌倉～室町時代を取りあげたが、この時代は前代までの皇室・公家政権から武家政権へと移行した時代であり、鎌倉に幕府が置かれたことによって、従前の京都周辺に集中していた政治・経済・文化・交通が、鎌倉をも円心として二元化された時代であった。律令制下においては主に国家への貢納物輸送として使われてきた東山道は、中世に至って、荘園年貢物の輸送、さらに中央諸都市の発達と地方の領主層の成長に伴う地方産業の勃興により、商品輸送路としての役割を果たしたのである。又、前代末期に興った新仏教である時宗や禅宗が東漸したのもこの時代である。このような状況の中足利は、前代の郡衙・駅家が位置し東山道が近傍を通っている周辺に寺院が建立され、又市が立つなど、この地方の主邑として発展してきたが、このことは東山道を媒介とした文化や技術の伝播・交流が繁く行われてきたことを物語っているものと思われる。本稿ではこれらについて詳述した。〔中世・道路・地域開発〕

1. はしがき

本研究は、道路機能の時代的変遷と地域社会へのインパクトに着目し、古代から江戸時代までの東山道を取りあげ、東山道の果たした役割を時代ごとに明らかにすると共に、地方の地域社会発展に及ぼした影響を東山道の経路に位置した栃木県足利市を例として考察しようとするものである。

この時代の道路は、為政者にとって国家・政権維持のための通信・情報収集さらに経済面からも重要な施設であり、且つ又、文化や技術の伝播・交流という側面をも有していた。このような前提を踏まえ、今回は大化改新から平安時代までを取りあげ、東山道の果たした役割を征夷・調庸輸送・仏教普及の3項目に分けて詳述すると共に、当時の足利の開発の状況、仏教受容の経緯について述べた。その結果当時の足利は、調庸や征夷のための武器・兵糧等を含めた国家への収納に対し、その負担に堪え得る生産力が培われつつあったこと、それに関連して、仏教を受容し得る層が形成されていったこと等を、大まかにではあるが窺い知ることができた。

今回はこれに続く第2報として鎌倉～室町時代を取りあげ、前回同様政治・経済・文化の面から、東山道がどのような役割を果たしたかを述べると共に、それに伴う足利の開発の状況について考察を行った。

2. 鎌倉時代

(1) 時代的背景

鎌倉幕府は、源頼朝が東国における累代恩顧の在地領主である武士層を統合して、1180（治承4）年から1185（文治元）年にわたる平家軍との戦いに勝利をおさめて、相模国鎌倉に創設したものであり、我が国最初の武家政権である。東海道諸国を基盤としたこの地方政権は、国家公権＝公家政権との接触を媒介として1183（寿永2）年東海・東山両道諸国を得ることにより東国を支配下におさめ、次いで1185（文治元）年の守護・地頭設置の勅許により全国の警察権を獲得するに至り、その支配権は全国に及んだ。幕府は頼朝を主長とし、頼朝と主従関係を結んだ御家人とによって組織され、幕府は御家人に対して本領（既得の所領・所得）を安堵し、又新恩を給付して生活を保障し、御家人は京・鎌倉の大番役（警固）や臨時の軍役等の奉公により幕府を支持した。

頼朝はまず御家人を統制する機関として侍所を設置し、次いで年貢・所領関係を司る公問所（政所）、訴訟・裁判を管轄する問注所の3庁を置き、これにより幕府は政治的統合中心の機構を整えた。又、地方支配として国ごとに設けられた守護は、地方行政官として地方を統轄し管国の御家人を統制し、さらに公領荘園ごとに設置された地頭は、荘官として現地の管理や治安の確保・維持、さらに租税の徴収や勧農をその任とした。こうして幕府は東国の一寒村にすぎなかった鎌倉を中心として全国を政治的に統合していったが、一方公家たちによる前代からの中央集権政治の中心としての京都もまた、伝統的な文化・宗教・経済の中心地としての機能は依然として継続されていたのである。

その後、1199（正治元）年に頼朝が病死し、後継者である頼家、さらに1219（承久元）年に三代將軍実朝も死亡すると、幕府は京都から將軍を迎えたが、しかしこれは全く名目だけの形式的な將軍にすぎず、政治の実権は北条氏が掌握し、ここに北条氏による執権政治体制が確立された。この時期は幕府の存続が危ぶまれた時期であり、このような幕府の動揺を利用して京都の公家政権は、1221（承久3）年後鳥羽上皇を中心に討幕の兵を挙げたが失敗し、その結果幕府の権力は強固なものとなった。この承久の変を契機として、幕府は武家政権としての機構を再編成し、朝廷を監視し朝廷－幕府間の連絡を司る機関として六波羅探題を京都に設置した。このようにして執権政治体制は種々の改革を通して強化され、執権北条泰時から時宗に至る約60年が幕府の最盛期であった。しかしその後は、1274（文永11）年・1281（弘安4）年の元寇による対外的危機と戦後処理の拙劣さや、それに伴う御家人の軍事的・経済的負担など御家人の不信をかい、加えるに北条一族の家臣の対立が激化し、幕府は政治的混乱に陥った。この機に乗じて京都の公家政権は、後醍醐天皇を中心として諸国の反北条氏の御家人を募り討幕運動を起こし、その結果1333（元弘3）年5月、約120年間続いた鎌倉幕府はもろくも崩壊した。

(2) 鎌倉時代の交通

大化改新詔（646年）・淨御原令（689年）・大宝令（701年）等により制定され整備されてきた京畿と地方を結ぶ七道の駅制は、強大な国家権力を背景として存在し得るものであったが、10世紀前後を境として台頭してきた在地領主としての武士層の成長や荘園の発展による令制土地国有制の崩壊等により、その機能は著しく低下した。このような状況の中頼朝は、関東における在地領主を統合して、武士による政治権力である幕府を東国の鎌倉に創設したのである。幕府設置により鎌倉は、東国を中心とした政治・経済の中心地となり、それに伴って交通も、従来の京都を中心とした一元的な交通から、鎌倉をも枢軸とした二元的な交通へと変化した。当時の最も重要な幹線道路は鎌倉（幕府）と京都（朝廷）とを結ぶ政治街道としての東海道路であり、前代の京都と東国とを結ぶ表街道であった東山道の重要度は低下した。しかし、幕府は1221（承久3）年の承久の変に際し遠江以東14ヶ国の兵を動員して東海・東山・北陸の3道を進軍したように、東山道はこの時代にあっても、依然として京都と東国とを結ぶ大動脈であることには変わりなかったのである。又全国御家人一律に課せられた京都大番役や全国農民に課せられた京上役等により、東山道諸国の御家人や

農民は、東山道を経由しての上洛も多かったものと思われる。この当時の経済の基本は荘園制であり、荘園領主は各地荘園から送られる年貢を基に家産経済を営んでいた。幕府も平家の没官領をはじめとする莫大な荘園を有する荘園領主であったが、当時京都には公家政権があり、この政府が所有する荘園や、皇室・公卿さらに有力社寺が所有する荘園の数も全国にわたって散在していた。従って、これら領主のもとへは各地荘園からの年貢が輸送されていたのである。

次に鎌倉を中心とする東国の交通であるが、前述の通り幕府は関東の在地領主である武士を統合し、主従関係を結んだ御家人層を基盤として組織したものである。従って彼ら御家人と鎌倉とを結ぶ交通網を整備することは、幕府の存続にとって極めて重要なことであった。特に遠江以東の東国御家人は、一年ないし隔年一度の鎌倉大番役のため鎌倉に参向し、又所領に関わる訴訟や、その他諸々の鎌倉往還、さらに幕府への年貢・貢納品の輸送や職人・商人の出入り等、鎌倉を中心とした関東一円の交通は急激に活況を呈したのである。このようにして鎌倉は幕府設置に伴い、京都と共に政治・経済・文化の中心都市として交通・流通の枢軸を形成したのである。図-1は1400年代における関東の交通網であるが、鎌倉時代にはこの前段階として、下地となるべき交通網がかなり整備されていたものと思われる。

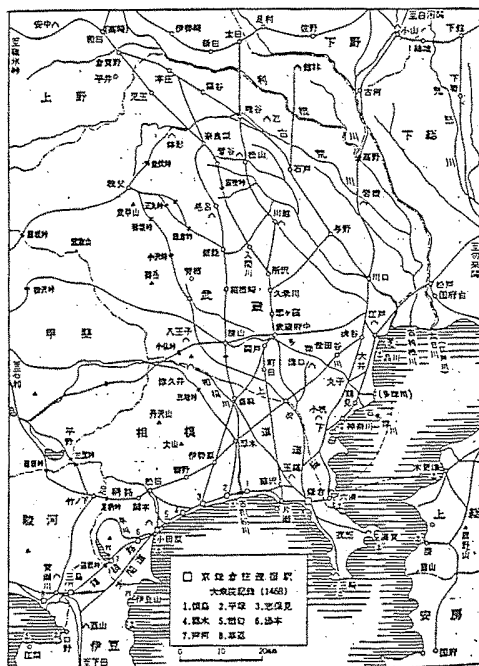


図-1 関東の交通要図
(「日本歴史地理総説 中世編」
藤岡謙二郎編 から転載)

(3) 鎌倉時代の足利

下野国足利荘を本領とする足利氏が鎌倉幕府と繋がりを持つのは、1180(治承4)年に頼朝が鎌倉の新造御所に移徙する際、足利氏の嫡流である義兼が供奉武将として参向し、後に御家人として頼朝と主従関係を結んでからである。その後足利氏は常に頼朝や北条氏の側近にあって幕府権力の伸長に協力し、平家追討をはじめとする諸合戦や北条氏の覇権確立過程における内乱等の武勲により、その勢力を拡大する。勢力の発展は所領の拡大により裏付けられるが、義兼の子義氏の代には上総国・三河国の守護に任じられるなどその所領を拡大し、鎌倉時代末期の足利氏の所領は、図-2に示すように17国に及ぶ30荘・郷・保であった。このように当時の御家人の所領は各地に分散しているのが普通であり、これを散所所領というが、この全国に散在する所領を管理するため足利氏は、常住する鎌倉の邸に家務執行機関(政所)を置き、その下に地方の郡・荘ごとに公問所を設置し、さらに各々の領内の郷単位に設けられた地頭代・郷司(給主)を統轄した。彼ら給主達は自ら現地に下向し、あるいは一族子弟等を所務代官として

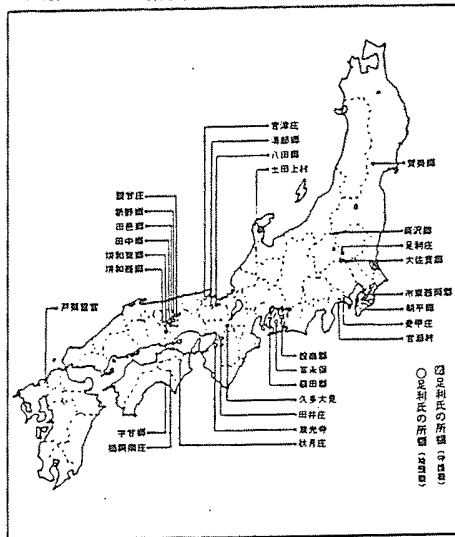


図-2 足利氏所領分布図
(「足利氏の歴史」栃木県立博物館から転載)

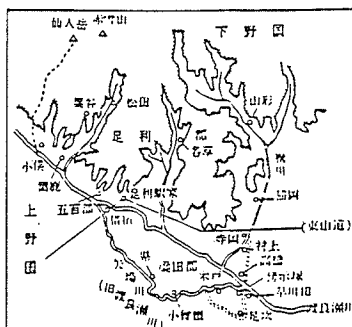


図-3 足利荘の領域
（「近代足利市史」から転載）

派遣して、直接郷内の管理にあたり、年貢の収納や勧農・開発等の任にあたった。

このように足利氏は全国各地に所領を有していたが、なかでも足利荘は、足利氏発祥の地であり先祖が開発し代々伝えられてきた土地であり、本領と呼ばれて最も重要な領地であった。図-3はその領域を示しているが、足利氏はこの足利荘を管理支配するため、荘内各郷に給主を配して勧農・開発にあたらせ、この荘内の給主を統轄する公問所を設置した。そして各郷の年貢済物の多くはこの公問所を通して、足利氏や特定の社寺に上納された。足利荘は、元来足利氏が開発した私領を鳥羽上皇の御願寺である京都の安楽寿院に寄進した土地と、伊勢神宮を本所に仰ぐ前代の梁田御厨とを含む領域であるが、鎌倉時代初期と考えられる安楽寿院の所領目録には、国絹71疋4丈、4丈白布 200端、油5石代、田98町7反 180歩、畠 106町2端60歩と記録されており、鎌倉時代に入っても尚当分にわたって安楽寿院に貢納されていたものと思われる。

当時荘内では給主の管理のもとに開発が進められ、水田のほかに畑には大麦・小麦・桑・芋等が栽培されていたが、これら農民のほかに荘内には、鍛冶・番匠（大工）・皮細工等の手工業者・職人も住んでいた。これは1196（建久7）年に義兼が荘内「城堀之内」（義兼の館内）に建立した持仏堂（後の錢阿寺）や、その他多くの寺院・神社、さらに給主たちの生活に必要な存在であった。足利氏の氏寺的な性格を持つ密教寺院として歴代の尊崇と保護を受けた錢阿寺や、法界寺・法樂寺等の旧仏教寺院と共に、鎌倉時代に入って武士・庶民層を中心に教線を広げた時宗や禅宗の新仏教の東漸に伴い、処々にその寺院が建立され、彼ら鍛冶や番匠は領主の厚遇をうけた。又鎌倉時代中期には、錢阿寺門前に市が立っていたことが義氏の置文により知られ、この周辺が足利荘における政治・経済・文化の中心として、荘内の開発が推し進められてきたものと思われる。

3. 室町時代

（1）時代的背景

1333（元弘3）年の鎌倉幕府滅亡に伴い、後醍醐天皇による親政（建武中興）が開始されたが、足利尊氏は、1335（建武2）年に旧鎌倉幕府の北条時行の乱を鎮圧するため鎌倉に下向し、乱平定後も鎌倉にとどまり、諸国の武士を結集して反旗を翻した。翌1336（建武3）年尊氏は光明天皇を擁立して（北朝）京都に入り、中興政府を倒して京都二条高倉に幕府を開いた（三代義満から室町）。しかし後醍醐天皇は吉野を拠点として（南朝）勢力の挽回を計り、全国的な規模で両朝の争乱が展開され、幕府の権力は安定したものではなかった。さらに足利氏内部でも尊氏と弟直義の間に亀裂が生まれ、將軍の補佐役である執事の高一族と上杉一族、さらには両派に分かれた豪族同士の戦いにまで発展した。こうした内乱を経て、尊氏からその子義詮へ政務の継承が行われ、三代義満の時代に南北両朝の合一を見たのである。

室町幕府の行政機構は、ほぼ鎌倉幕府の機構を踏襲したものであり、鎌倉には東国支配を目的とした鎌倉府を置き、その長官を関東管領と言ったが、後に自ら鎌倉公方と称するようになった。鎌倉府の職制が幕府に準じて整備されるとその権力は絶大なものとなり、しばしば幕府と対立するまでに及んだ。

室町幕府は三代將軍義満の時代がその全盛期であり、前述の如く南北両朝を合一し、山名・山内氏等の有力守護の勢力を抑え、さらに鎌倉府を牽制してほぼ全国を統一したが、幕府権力の基盤としての直轄領（御料所）は少なく、幕府の重要な財源となったのは貨幣経済発達に伴う土倉・酒屋と呼ばれる金融業者（高利貸し）から得る課税であった。その後1467（応仁元）年から10年に及んだ応仁の乱後は、幕府の威令は行われず、將軍の統制力は著しく弱体化し、將軍は強大な守護大名の勢力の均衡の上に擁立される傀儡となり、

やがて群雄割拠の戦国期を迎えるに至り、幕府はその存在すらも有名無実と化した。1573（天正元）年に15代将軍義昭が織田信長によって京都を追放されたことにより、約230年間続いた室町幕府はここに滅亡した。

このように、室町幕府は有力な守護大名の勢力の均衡の上に存続した政権であり、前代の鎌倉幕府ほどの権力はなく、地方における守護代・国人層は経済的・軍事的基盤を固め、やがて戦国大名へと成長してゆくのである。このような背景には、農業や手工業技術の発達に伴う種々産業の発達・市場の活況と相俟って、職人・商人の活動の興隆もあったのである。さらに又、前代に興った新仏教が全国に浸透していったのもこの時代である。

（２）室町時代の交通

室町幕府は鎌倉幕府ほどの威令を持たなかったため、直接街道や宿駅・駅制の整備は行われなかった。幕府が京都に置かれたため再び政治は一元化し、京都は政治・経済の中枢となり、さらに守護大名の多くが京都に居住し京都の商人と結んで領国からの物資の輸送にあたらせたので、地方の物資は京都に集まり、京都と地方との交通は活況を呈した。

このようにして物資は京都に集中し、旺盛な消費活動と相俟って、京都をはじめ奈良や堺にも定期的な市場が発達した。又、地方においても大名領主層の成長や庶民層の経済的発展、職人・商人の活動の活発化に伴って地方産業が勃

興し、京都・奈良・堺等の中央諸都市の商人は地方の産物や原料を商品として中央へ搬送するようになった。これら中央諸都市では、高級な織物・鋳物、さらには舶来品等も売り出され、又地方の産物も出廻ったのである。表－１は室町時代における東山道諸国の物産表であるが、これらの物産・商品を運ぶ行商人は、千杵櫃あるいは連雀を担ぐことから高荷・連雀と呼ばれ、次第に馬や船により大量に輸送されるようになった。

このようにして諸国の商品は大規模に流通しはじめ、中央と地方は商品を中心とした流通によって結ばれるに至ったのである。

近 江	納豆・柿・麻布（高宮）、陶器（信楽）、鋳物（八日市） 酒（百濟寺）、鮎・鯉（琵琶湖）、瓜（江州瓜）
美 濃	真桑瓜・柿・美濃八丈・美濃上品・美濃紙・鍛冶（関）
飛 騨	紙・木材
信 濃	木材・梨子・布・麻・銅
上 野	_____
下 野	絹（足利）、鋳物（佐野天命）
陸 奥	金・銀・鉄・漆・布
出 羽	_____

表－１ 東山道諸国の産業

（「日本歴史大辞典別刊」奈良本辰也編 参照）

（３）室町時代の足利

室町時代の足利荘は、幕府の直轄領（御料所）として管理支配され、荘内に公問所（政所）が設置され幕府と直結し、そこから代官が派遣されていた。しかし前述のように、東国の管理を目的として設けられた鎌倉府（鎌倉公方）と幕府との対立が激化するに伴い、足利荘の支配権はその都度移動した。例えば、1368（応安元）年～1399（応永6）年は幕府支配、1400（応永7）年～1416（応永23）年は鎌倉府、1418（応永25）年～1428（正長元）年幕府、1429（永享元）年～1440（永享12）年鎌倉府等である。このように足利荘の支配権は度々幕府と鎌倉府との間を交互したが、代官による勧農や、職人層の活発化に伴う農業技術の向上等により、荘内は図－４に示すように律令時代の郷数の6倍もの郷・村落が開発されるに及んだのである。そしてこれらの郷は、今日の集落のもととなったのである。

荘内の土地所有は索綜としているが、前代以来足利氏歴代から寄進等により所領を拡大してきた鏝阿寺領（例えば、1241年の高橋・木戸・小曾根・田島郷、1351年の借宿郷、1429年の名草郷の参分壺、等）、その他鶏足寺等の荘内の寺社領などと共に將軍家の所領があるが、この將軍家所領の郷名・田数については一部推定されているが未だ解明されていない。しかし幕府へ上納された米及び物産等の年貢は、この將軍家所領

地からのものだったものと思われる。

又、荘内最大の所領を有する錢阿寺は、その所領拡大と共に整備され、室町時代にはその周囲に十二院が立ち並び、この十二院の寺が毎年輪番で寺務を担当する行事が定着した。この足利氏歴代の尊崇と保護を受けた錢阿寺と、そのまわりの十二院の寺容は、近傍を東山道が通っていたこととも相俟って、荘内の文化・交通の中心地として町が形成されていたものと思われる。鎌倉末期には錢阿寺境内に市が立ったことが錢阿寺文書によって知られ、又室町時代初期には、鶏足寺文書により錢阿寺門前に市が立ったことが想定されている。さらに、室町時代中期以降の代官・長尾氏の治世時の絵図には、二日町・三日町・八日町が描かれており（図-5参照）、市が定期的に開設されていたことが知られる。これらのことは、農業と共に織物や鍛冶等の手工業が盛んになったことを物語り、この背景には農民・職人・商人層の漸進的な経済成長や消費活動の増大があったことが窺われる。そして、さらに中央諸都市の商人による地方産物の買付等により地方の産物は中央へ運ばれ、表-1のように、足利では特に絹織物が中央諸都市に出廻ったものと思われる。

又、前述の錢阿寺と十二院をはじめとする旧仏教寺院と共に、新仏教である時宗や禅宗（臨済・曹洞宗）も普及し、その寺院も建立された。17世紀初頭までに時宗寺院3、臨済宗寺院18、曹洞宗寺院16を数えるが、これらのことは、武士や庶民層がそれを受容し得るだけの経済的・精神的成長のあらわれであると共に、僧や、寺院建立のための技術者・職人の交流も必要であり、総じてこの時代には、商品流通を主とした経済的、さらには文化・技術を中心とした中央と地方との交流が繁く行われていたものと思われる。

4. むすび

鎌倉～室町時代は、前代までの皇室・公家政権から武家政権へと移行した時代であり、鎌倉幕府の設立によって、京都周辺に集中していた政治・経済・文化が、東国の一寒村であった鎌倉をも中心として二元化された時代であった。それに伴って交通もまた、京都を中心とした一元的交通から、鎌倉をも枢軸とした二元的な交通へと変化した。

前代までの京畿と地方とを結ぶ七道の駅制は、荘園の発達による令制土地国有制の崩壊等によりその機能は低下したが、鎌倉に幕府が置かれたことにより、東海道の交通は前代にも増して活況を呈した。それに伴って東山道の機能は低下したが、しかし京畿と東山道諸国とを結ぶ大動脈であることには変わりなかった。鎌倉時代には京都大番役や京上役等の義務があり、さらには皇室・公家や京都周辺の有力社寺が有する荘園からの年貢の輸送等もあった。又、時代が下るにつれて地方産業の勃興を見、中央諸都市の商人層の活動が活発化するに及び、地方の物産も京都・奈良・堺などの中央諸都市へと流れたのである。又、平安末期に興った時宗・禅宗等の新仏教は鎌倉時代に入ってその教線を広げ、徐々に東漸していったのである。

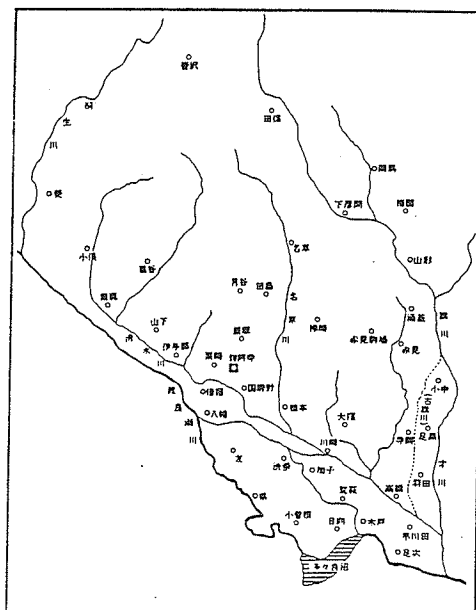


図-4 足利荘内郷村名図

（「足利氏の世界」柳田貞夫 から転載）

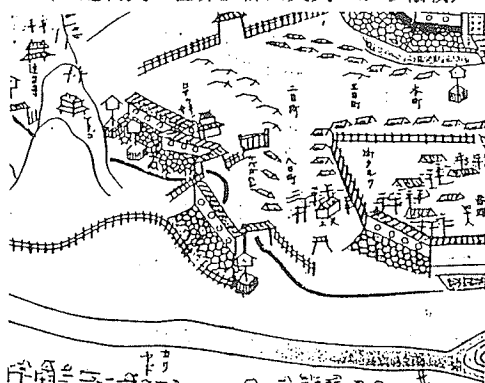


図-5 室町時代の足利絵図

（「足利考古図録」川島守一 から一部転載）

このように、律令制下においては主に国家への貢納物輸送として使われていた東山道は、中世に至って、莊園年貢物の輸送、さらに中央諸都市の発達と地方の領主層・庶民層の成長に伴う地方産業の勃興により、商品流通路としての機能を担ったのである。

又足利は、鎌倉時代にあつては幕府御家人足利氏の本領として、室町時代には將軍家の御料所として、足利氏歴代の管理のもとに開発が進められ、特に足利氏の尊崇と保護をうけて所領を拡大した錢阿寺は、足利荘の中心的役割を果たした。錢阿寺の周囲には十二院が建ち並び、さらに新仏教である時宗や禪宗寺院も多く建立された。それと共に、錢阿寺境内や門前には市が立ち、さらにそれは定期的な市へと発展した。これらのことは庶民層の経済的・文化的向上を意味し、且つ又、行商人や鍛冶・番匠等の職人層の活動が活発化してきたことを物語っているのである。前代には郡衙・駅家が位置し、東山道が近傍を通っているこの周辺がいち早く町として形成され、とりわけこの地方の主邑として発展してきたのには、東山道を媒介とする文化や技術の伝播・交流が、繁く行われていたことを意味しているものと思われる。

(参 考 文 献)

- 1) 龍肅 「鎌倉時代(上)」 春秋社 1957.8.20
- 2) 豊田武・児玉幸多編 「体系日本史叢書24 交通史」 山川出版社 1982.8.5
- 3) 豊田武・児玉幸多編 「体系日本史叢書13 流通史Ⅰ」 山川出版社 1982.12.20
- 4) 藤岡謙二郎編 「日本歴史地理総説 中世編」 吉川弘文館 1977.12.10
- 5) 赤松俊秀監修 「日本仏教史Ⅱ 中世編」 法蔵館 1975.6.20
- 6) 遠藤元男・大森志郎 「日本史ハンドブック」 朝倉書店 1965.11.10
- 7) 奈良本辰也編 「日本歴史大辞典別刊日本歴史地図」 河出書房 1964.7.20
- 8) 足利市史編纂委員会 「近代足利市史 第一巻」 1977.3.1
- 9) 柳田貞夫 「足利氏の世界」 1980.12.15
- 10) 栃木県立博物館 「足利氏の歴史」 1985.10.6
- 11) 川島守一 「足利考古図録」 泰文堂 1938.8.1
- 12) 矢崎武夫 「日本都市の発展過程」 弘文堂 1970.12.10
- 13) 児玉幸多編 「史料による日本の歩み 中世編」 吉川弘文館 1983.4.1
- 14) 奥富敬之・佐藤和彦・鈴木国弘・田代脩・中尾堯 「日本の中世」 梓出版社 1984.10.10